

射

撃

0014

取録

供覧

軍務局

教育部

艦政本部

佐藤第三八

局員

進達

明治三十七年佐藤鎮守府小銃教練射撃成績表 志葉

小銃射撃成績報告 志葉
小銃射撃成績表 志葉

右進達候也

明治三十七年一月四日

第一部長官 佐藤鎮守府員令長官 佐藤鎮守府員令

海軍大臣 野村浩平

第一部

海軍

0015

明治三十六年佐世保鎮守府小銃戰鬥射擊報告

艦團隊 本年射擊 疾病事故 本年射擊
校所名 總人員 ^{ニ従事スルハ} 終ラサル人員ル人員
各 個 部隊 (隊) 艇 隊 總發射彈

艦團隊	本年射擊 疾病事故 本年射擊	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
松島	一九九	。 一五九	。 一五九	五五二	二六三	〇三〇	二二六	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九	。 九九
海門	一二六	二六	一〇〇	一六三	一二九	一七五	五八	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九	九九
大島	五七	二	五五	四八	九二	九五	六三	一〇八	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
不知火	四一六	二〇	三九六	二二三	一八三	三三八	二二八	六三八	一九二	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
海兵團	九〇	一〇	八〇	七五	一七七	七六	二〇八	三三七	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五
水雷團	五五	一七	三八	二一八	二五五	二二二	二〇三	二〇八	一四五	四三九	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四	一九四
長崎敷設隊	一一三	一四	一〇九	五一	二二七	三三八	六九	一七一	二二三	二九六	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二
第九艇隊	一一三	一四	一〇九	五一	二二七	三三八	六九	一七一	二二三	二九六	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二
第十艇隊	一一三	一四	一〇九	五一	二二七	三三八	六九	一七一	二二三	二九六	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二
第十一艇隊	一一三	一四	一〇九	五一	二二七	三三八	六九	一七一	二二三	二九六	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二
總計效果	一〇二六	八九	九三七	一〇七一	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇

備 考

明治三十六年十二月二十八日

佐世保鎮守府

明治三十六年佐世保鎮守府信捕部員及機關部員小銃射擊成績表

艦團隊 校所名	本年射擊 二從事スベキ 為射撃ヲ ノ完結スル ニ		本年射擊 ノ完結スル ニ		人員 ノ効果		人員 ノ効果		人員 ノ効果		人員 ノ効果		人員 ノ効果	
	總人員	終了人員	總人員	終了人員	人員	効果	人員	効果	人員	効果	人員	効果	人員	効果
大島	二一	〇	二一	〇	〇	二	九五	二九五	二九五	三三四	三四三	一四六	一四六	七
葛城	一九	〇	一九	〇	〇	一	五三	〇	〇	四三〇	四三〇	一四七	一四七	七
海門	四二	三	三九	三	一	一六	二五	九	〇	一〇五	一〇五	一七	一七	七
警城	八	二	六	〇	〇	一	六	一	〇	一六	一六	三	三	七
松島	一一	〇	一一	〇	四	三	二	二	〇	一六	一六	三	三	七
不知火	二三	〇	二三	〇	〇	四	四	四	〇	一四	一四	一四	一四	七
海兵團	二三	三	二〇	七	〇	三	一〇	三	四	四	一	一	一	七
水雷團	五	三	四	〇	〇	二	三	三	〇	九	九	三	三	七
艦隊敷隊	二	〇	二	〇	〇	一	四	二	四	四	一	一	一	七
長崎敷隊	二	〇	二	〇	〇	一	四	二	四	四	一	一	一	七
第九艇隊	一九	〇	一九	〇	〇	一	三	一	二	二	一	一	一	七
第十艇隊	四二	二	四〇	〇	〇	二	五	二	二	一〇	一〇	一	一	七
第十一艇隊	七	四	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	七
第十二艇隊	三六	一	三五	〇	〇	一	三	四	一	六	六	二	二	七
第十三艇隊	三五	二	三三	〇	〇	一	三	二	二	八	八	二	二	七
總計効果	五六六	二〇	五四六	一二	二	二	四	七	五	三	三	三	三	七

明治三十六年十二月二十八日

佐世保鎮守府

至急

艦政本部長



第一部長



部員



副官



参事官



一書

三月二十一日午五时起案

大臣

總務長官



軍務局長



局員



教育本部長



第一部長



電報指示案

三隊一五六號 岩島 松島 栢島

0019

演 軍

三十二冊加札敷録封撃、洋、思

明治三十七年一月廿二

二五三 初令案

為我第三艦隊司令官及上申、認洋

並案、才、名、心、白、云

明治三十七年

一月廿二 大臣

横、美、陸、海、日、皇、軍、大、臣

0020

船政本部

第一號

三隊第一三六號

嚴島松島橋立三十二相加砲教練射擊
致度上申

客年十二月二十二日教本第九九四号、二一ノ
以テ教育本部部長、日、演習少尉、補佐
巨砲、全射、實地研究、爲、嚴島松島橋立
三十二相加砲通帯、播單、弱裝藥、危、相立
填、播單、減裝藥、參、個、變、射、ス、ン、キ、被、命、之、
三、要、之、單、藥、已、受、領、弁、有、之、限、可、此、等、
右、單、藥、以、テ、教、練、射、擊、に、充、て、爲、致、度、上、
條、待、之、許、相、成、度、此、段、上、申、候、也、
明治三十七年一月十九日

編撰分社印刷

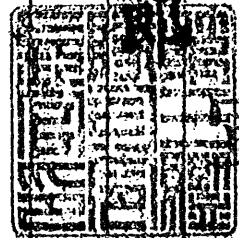
一三

0021

海軍大佐 野山本 権天衛 殿

第三艦隊司令長官 志摩 七郎

海軍



ES00

0022

先

軍令部長



次長



作戦部長



源

艦政本部長



第三部長



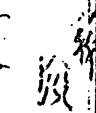
會計部長



副官



参事官



三井物産



大臣

三月二十三日 起案

次官



軍務局長



局長



電信局長 東洋電報白十字軍艦字角印付

0023

艦政本部

第一部長

軍務局

英海軍機密第三三八號

軍艦春日十尹砲高角度射撃試験認許相成度上申

軍艦春日日搭載ノ十尹砲ハ三十五度ノ仰角ヲ以テ發射
 シ得ル橋ニ裝置相成リ在来安式砲架ニ特ニ高
 角度射撃ヲ行ヒ得ル目的ヲ以テ構造シ免テ、如
 シ候セシ當工廠検査ノ結果十分高角度射撃
 ニ耐フルモノ認候執テ春日艦長ニ於テ將來戦艦
 上素距離ヲ擲射ヲ行ハル必要ニ有之ニキ
 ニ付果シテ高射撃ニ耐フルモノ力有ヤ工廠検査ノ実
 地試験方英海軍ノ次第ニ有之又工廠ニテ砲架
 ノ構造上大ニ研究スル價値アルモノト認メ候ニ付
 本艦ニ於テ高角度射撃ヲ施行致スル必要ニ

行ハル

三九

0025

彈丸本艦より陸揚せる十甲実弾三三美支島
之候發射數ハ三發ヲ以テ二十度、二十五度、三十
度ト砲架及砲壁ニ故障ノ有否ヲ檢査スル候
大角度ヲ賦與スル目的ニ有テ信條實弾三
個ヲ以テ高角度射撃試験而認行セ成度此致
上申仕候也

明治三十七年三月五日

吳鎮守府司令長官 柴山 云

海軍大臣 野澤 少年 檢査 衛 殿



也 近テ本件ニ對シテ電候ニ務ル相成候也

0026

海軍 射撃

大謀

大謀

小會

副官

時

時

時

三月十日

時

三月十日

佐水教第二

府司令

時

造兵部宛

武庫

武庫主管

0027

艦政本部

第一部長

演習射撃施行致度義付上申

今般艦隊計画基向高崎側防砲台トシテ拾式行連射

砲門重四七密連射砲門輕四七密連射砲門及航砲

トシテ輕四七密砲門三七密諸砲砲臺門ヲ裝備相成候付

戰時増加負タル豫備后備兵ヲ以テ此等諸砲台兵員充

實仕候所此等兵員中ニ現役中書ニ砲員タリテトキモ

有之且ツ砲種様式変更トシテ指揮ヲナサシムル為メ

殆ト新タニシテ訓練必要ヲ認シ再未專ラ訓練信

果略本習熟ヲシタリト魚尾高本實際ニ射撃ヲ施行セシメ

置ケニラガレバ港口防務未ダ安心致難候付本隊ニ限リ

特ニ平時通リ年々年度演習射撃施行之義ヲ認許

相成度此段上申候也

此射擊巨高、義、砲台、位置置海峽、面、居、ラ、以、
地形上射擊規則、准據致難候、有念、以、段、申、
添候也

明治七年三月十日

佐世保軍設隊員 山本正勝



佐世保鎮守府員 倉官 篠島貞規 殿

0028

艦政本部長



第一部長



部員



副官



参事官

三月七日乙卯 廿二起紫

三月廿二日



大臣

總務局長



軍務局長



参事官



日進

電報掛合衆
於砲台付控、佐々原

0029

三月廿二日



海軍

現存 己ノ雜記
三十七年四月廿二日

0030

日進消耗弾条



中島重三郎
海軍

四七三重	十二斤	十五梅	八甲速射砲	教練	野闕	年中試験	公認発行	合計
120	200	196	48		8	3	20	189
36	60	56						310
3	0	3						325
30	50	70						79
三月廿六日								

(社) 印刷局 第 49 号

0031

艦政本部

大臣

電

三月廿五日

海軍省

8 = 1
6 = 2
12 = 3
8 = 8 - 2
6 = 42 = 3
12 = 30 = 3
24 = 20

海軍

日進一帯特設系にて艦艇特別の整備
ヲ施行せしむるに付、
八甲建造の砲徹甲榴弾八發、六甲建造の
砲徹甲榴弾四十二發、十三甲建造の砲徹
甲榴弾三十發、四十七甲建造の山内輕
生砲徹甲榴弾廿四發

七件

海軍省

海軍省

(17) 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

0032

電報送達紙

受信人住所氏名

海軍大臣

受信人住所氏名

マリ

他人宛タル電報ノ配達ヲ受ケタルモノハ此由ヲ符箋シ直チニ此レヲ配達シタル電信局所へ返戻スベシ決シテ受取本人へ直送シ又ハ手渡シスベカラズ

友

報局

指定

記事

第 三 号
日 號
分 目
字 分
分 分

ハ
ハ
ワ
ア
ア
テ
ニ
イ
レ
ル
の
ク

0033

電 報 送 達 紙

局 着		局 發				名 氏 所 居 人 信 受	
取 受 所 信	信 受 時 分	信 受 時 分	第 日 號	報 局 號			
			三 身 五				
定 指					名 氏 所 居 人 信 受		
ハ ト ハ ニ ア ニ ヲ ヲ イ ヲ ア ニ イ フ イ ノ ニ ロ ツ イ 〇 又 フ 〇 イ 〇 ハ ノ 〇 〇					他人へ宛テル電報ノ配達ヲ受ケタルモノハ此由ヲ 符箋シ直チニ此レヲ配達シタル電信局所へ返戻ス ベシ決シテ其受取本人へ在達シ又ハ手渡シスベカ ラズ		
事 記							

0034

訓練、為、特設砲射擊為致度件上申

艦政本部

一 公稱

一一二一
一一三三

一 號數 設艇

諾典砲

各壹門

全

壹門

第一節

一 第一天橋

一 白川丸及青龍丸

七 拇五克砲各壹門

右防禦計畫ニ依リ夫々備砲候ニ就テハ訓練、為、砲煩射

擊規則ニ依リ各砲年度額彈數半額ノ範圍内ニ於テ總テ艇

砲ニ準シ射擊為致度候條此段仰御允許候也

明治三十七年四月二十一日

舞鶴鎮守府司令長官日高壯之



Handwritten signature or note on the right margin.

海軍大臣男爵山本權兵衛殿

0036

艦政本部長



第一部長
第二部長

部員



會計課長



副官



參事官

去月
付



大臣

一三七年十一月一日起案

次官



軍務局長



局長



教育本部長

第一部長

指今案

海軍部
官房第四三七六號
海軍部
第一部長

官房第四三七六號

海軍部

七三三
ナフニ

0037

清 皇

但 福 海 下 高 小 統 義 國 討

授 権 行 件 認 許 久

昭 和 三 年 十 月 廿 日

0038

舞鶴第一〇三號

海軍

少五

具申

別紙比叡艦長上申豫備役海軍下士卒小銃戰鬥射擊施行件、兵員、訓練射擊術、習熟上必要、儀、候、条、海軍小銃射擊教範戰鬥射擊指定彈藥包數、範圍内ニ於テ射擊施行方御承認相成様致度此致具申候也

明治三十七年十月二十九日

舞鶴鎮守府司令長官日高壯



海軍大臣男爵山本權兵衛殿

官房第廿三七八號

0039

②

③

本件必要
以取
福故

海軍下士卒小銃戦闘射

射撃術ノ習熟上必

銃射撃教範戰鬥

範圍内ニ於テ射撃施

此段具申候也

日

長官日高壯之丞



陸兵衛殿

0039

②

③ ④

本件必要上認メ候事
認許相成候様
取斗成候
海軍本部 第一部長
軍務

0040

司長 濱田 參謀 高嶋 副官 高嶋

此後普... 六五號

工廠

106

工廠

106

106

豫備役下士卒ニ小銃戰鬪射撃ヲ施行致サセ度儀ニ付上申

本艦乗組豫備役下士卒ノ大部分ハ現用
 世五年式海軍銃ヲ用イテ實彈射撃ヲ施
 行致サセ事無之然レ處明治廿六年七月海
 總第二三六八號ヲ以テ定メラレタル豫後備役下
 士卒各志人ニ對スル小銃彈藥消耗年額ノ
 範圍内ニ於テ教練射撃ヲ施行致サセ候得
 共目下ノ形勢ニ於テハ尙ホ戰鬪射撃ヲ施行致
 サセ可成實彈射撃ニ習熟セシメ度本職ノ
 希望ニ候條此際特ニ御允許相成度比段上申候也

舞鎮第... 〇三號

第... 二八四號

第... 七六八號

明治七年十月廿五日 舞鶴

舞鶴鎮守府司令長官日高社之丞殿

北畠長佐の木廣



0042

徳
習
書

心
居
之
中
也

心
習
也

心
習
也

心
習
也

0049

久保田納

0044

聯合艦隊

參謀長

參謀

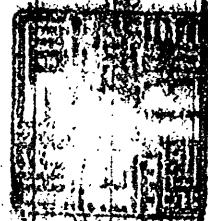
副官

書記

墨濱分社印刷

音羽機務第五九號

十一月十三日



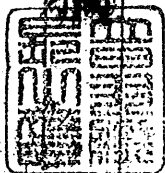
第一本艦砲術長ヨリ提出ノ分及達達
候也

式通

明治十七年十二月九日

第一部長

音羽艦長海軍大佐有馬良輔



聯合艦隊司令長官東郷平八郎殿

第一部長

海

軍

0045

1.42

海軍

別紙報告仕候也

明治三十七年十二月

音羽砲術長海軍大尉金田 季の太郎

音羽艦長有馬良橋殿

0046

明治三十七年度射撃報告

目次

一 射撃施行關する事項

射撃地、適否

標的、具合

艦船、運動法

砲火、指揮

号令、傳達方法

監的、距離測定

二 射撃訓練關する事項

射撃手訓示

0047

講評並研究要領

三 兵器ニ関スル事項

距離指示器研究

望遠鏡照準器ニ関スル研究

變壓器並電路研究

四 射撃手成績報告表

砲熕散練射撃手成績表

小銃散練射撃手成績表

六

一二

一三

一七

一九

通三

通一

0048

明治三十七年度射撃手報告

本艦兵員第一回補充ハ本年六月一日ヨリ
當時本艦尙ホ未ダ艤装束中ニ係リ艦員ハ
陸上事務所ニアリ此際七月二十日ヨリ八月二
十八日ニ至ル九日間ニ亘リ大津射的場ニ於テ本年
度小銃射撃ヲ終了セサル兵員ニ付キ小銃教練
射撃手ヲ施行セリ但シ其迄來艦ノ兵員ニ付キ施行時艦ヲ得ザリ
第二回兵員補充ハ八月二十九日ニシテ同日ヨリ
始メテ全員艦内ニ赴卧スルニ至リ九月五日及七
日、兩日砲煩装束備役射ヲ籠山沖ニ行ヒ

同六日第一艦隊ニ編入八日横須賀出港途
 中神戸及佐世保兩港ヲ至テ十六日黄海ニ於テ
 第三戰隊ニ編入爾來教カラ内筒砲射撃手
 等ノ訓練ヲ行ヒ同二十一日第一期艦砲教練射
 撃ヲ施行スル運ニ至リシモノニテ素ヨリ創
 ノ訓練ヲ累スル違ナリ其成績ノ如キ其結果ノ不
 良ナルヲ自認セズンバアラズ爾后一再ニ時機ノ許ス限
 リ内筒砲射撃手等ノ訓練ヲ勵行シ越ヘテ十一月
 七日第二期艦砲教練射撃手ヲ施行セリ其
 成績ヲ前回ニ比スルニ大ニ進歩ノ状見ルベキモノヤ
 リト雖モ尚ホ幼稚ノ域ヲ脱スル今後更ニ訓

0050

練ヲ積ミ充分ノ効果ヲ収メ17期ス

尚モ右ノ事情ナリシヲ以テ本年度ハ銃戰射撃及

艦砲射撃三期教練射撃以下ノ侯施スルマデ至ラザリシ

今々兩期射撃・國スル概要及卑見教項ヲ左ニ

陳ブ

一、射撃地ノ適否ニ關スル事項

一、射撃地ノ適否——旅順口沖ニ於テ施行ス水深

深キニ退ギ標的ノ敷糸苗困難ヲ覺ユ殊ニ岸一期

射撃ニ於テハ風波稍ヤ烈シ標的ノ通視明瞭ヲ欠ケリ

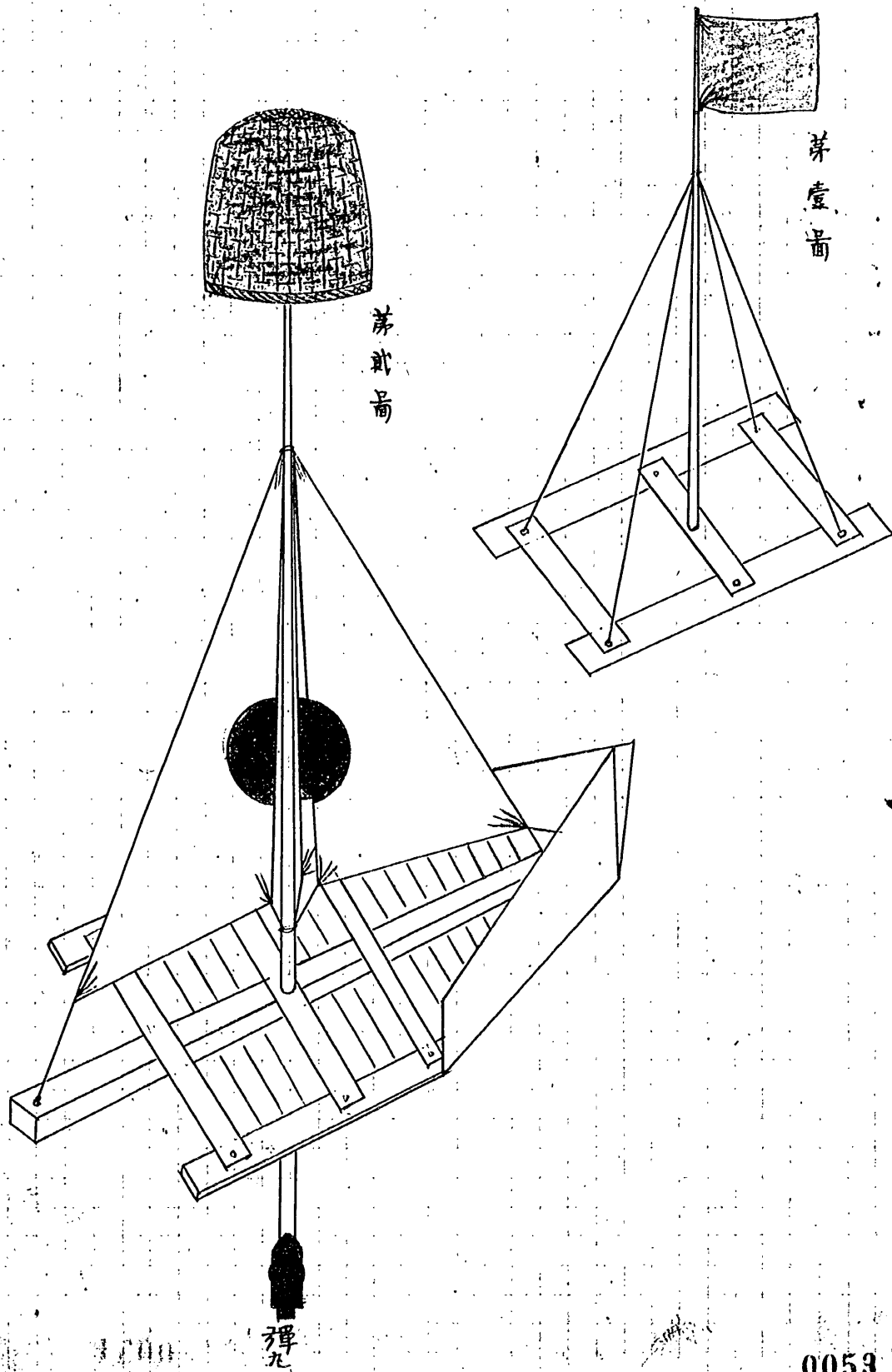
二、標的ノ具合——戰時可成不用品ラ陸揚スル

趣意ヨリテ普通海上標的ノ準備ナリシ為ニ岸

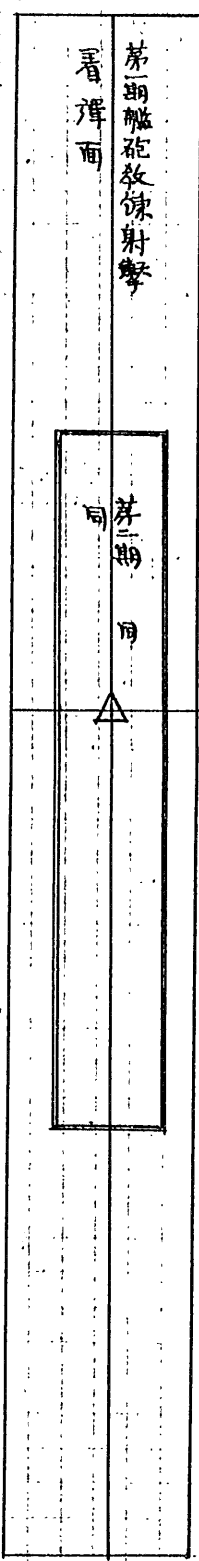
一期教練射撃手、アツテハ不得已、第一面ニ入ス如キ
静止標的ヲ用ヒシニ通視頗ル明瞭ヲ欠キ、殊ニ射
標ト風向ト一致セシキ標的ノ赤道ハ其側面ノミヲ
現ワシ、二千米突外、距離ヲ望見最モ困難
シ極メタリ

之レ或ハ第一期教練射撃成績ヲ不良ナラシメタル
一因ナラザルベカラズ

第二期教練射撃ノ際ハ以上ノ結果ニ鑑ミ、第一
二面ノ如ク静止標的ヲ及製成シ使用シタルニ最
モ遠見ニ通シ、風向如何ノ差別ナリ、好結果
ヲ得タリ

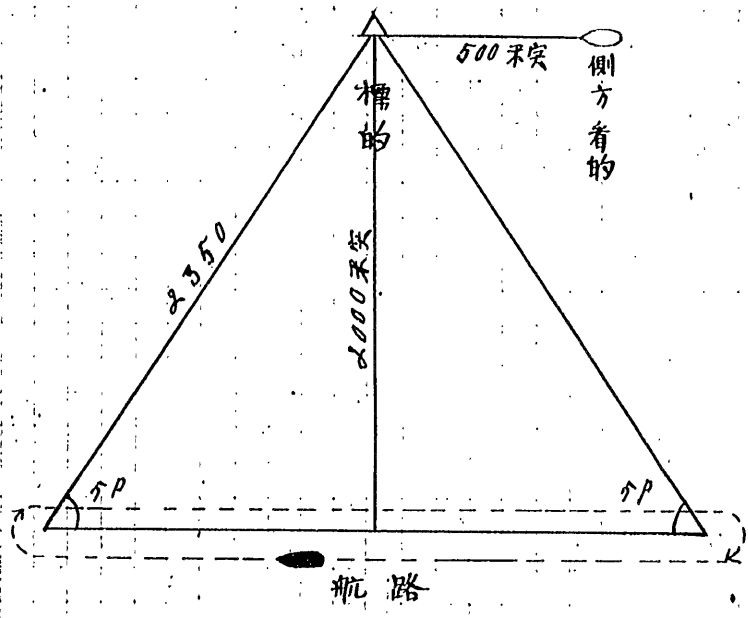


0053



第四番

第三番



0054

三、艦艇ノ運動法——西期射撃共第三面ニ示ス
如キ運動法ヲ採リ

本艦速力十一海哩ヲ用ヒテ

四、砲大ノ指揮——本艦制定ノ砲戰々策ニ基キ

艦橋ヲ全然距離号令ヲ掌握シ砲台長ニ苗頭

号令ヲ一任スルノ方法ヲ全砲台ヲ通シ各一門宛ノ

射撃ヲ行ヘリ

五、号令傳達方法——本艦特有ノ距離指示鬼

ニヨリ距離号令ヲ指シ其他ノ命令号令ハ持

配置サレタル傳令ヲ使用セリ

距離指示鬼ニ宛スル意見ハ別ニ之ヲ速ク

0055

六、監的

本艦監的及測方監的三種

ヲ用ヒ本艦・アテハ射撃手砲ノ前後ニ各二人ノ看的

手ヲ位置セシメ而シテ各一人ハ丁字形看的卷ヲ用ヒテ

左右偏差ヲ觀測シ他ノ人ヲシテ之ヲ書キ取リメタリ

側方看的ハ第三面ニ示ス如ク標的ノ側方五百米突

ニ位置セシメ前同法ニヨリ前後偏差ヲ觀測シ直

ニ信年ノヨリ本艦ニ通ゼシメタリ

七、距離測定

測距手ヲシテ「バーエリドストラウダ」

距離測定卷ニ因リ距離ヲ測定シ距離手ノ令官ノ

参考ニ供セシメタリ

測距手ハ本艦配置ノ定ムル如クシテ水兵二人ヲ指定

シ平戦時トモ專ラ距離ノ測定ニ任ル者ナリ
第ニ射撃訓示ノ関スル事項

一射撃訓示

第一期教練射撃ニ付キ訓示

凡ク今日ノ勝敗ハ砲火ノ効果如何ニ存シ軍艦音
羽ノ軍艦多シ威カラ顯有スル以所ニモ亦タ莫ク砲
煩ノ有ル由ニ然カモ砲煩ハ死物ナリ活用ハ人
ニテリ吾人輻々砲大司掌ノ任ニアルモノ須ラウ奮勵
セザンベカス況ヤ今日敵ト目撃ノ間接ス港内
艦ノ逸出莫ク且タラ固ラシク一朝砲火相見ル自彼
我ノ優劣ヲトスルモノ洵ニ平素訓練ノ多少ニ外ナラズ

0057

今や本艦就役以來已、其月、近々毎創ノ際素
ヨリ充テノ練磨ヲ經ガリシト云々今日茲ニ第一期
教練射撃ヲ實施スルノ機運ニ際會ス即チ之
悉興スベキ將校並ニ下士卒タルモ其旨シク一令一動モ
苟モセズ以テ教練射撃ノ全効ヲ収ムルニ努力カスルヲ
要ス尚ホ左ニ本射撃ノ関セテ注意スヘキ事項及ビ
研究セントスル項目ヲホス

一) 本射撃ニ於テハ發射速度ノ遲速ヲ論セストモ凡ソ
正確ナル修正ハ連續間断ナキ發射ニ因テノ好
實施スルヲ得ルモノニシテ過度ノ入念ハ却テ彈
着ヲ粗慢ナラシムルヲ記スベシ

- (二) 第一期射撃にアリテ、発火方法トシテ、変ノ器電路ヲ用ヒ故障アリタル件、発火大電池電路ヲ用ユル一自シ、第二期射撃にアリテ、電路ノ試(用セリ)
- (三) 各砲ハ、発砲前、變ノ器電路及ビ、発火大電池電路ノ導通ヲ檢スル
- (四) 不発アリタル件ハ、必ズニ、分間ノ猶豫ヲ嚴守ス
ズキ
- (五) 砲ノ為メ、砲具故障如何、注意スル
- (六) 各砲共、退却長ヲ記スル
- (七) 装填前、内部装薬ヲシテ、發火ニアラシムル如ク

0059

取扱フ

演習用彈莖ト常装莖彈莖トヲ誤用セザル
ル

(九) 照準器並、其、目盛板ハ發砲激動キ要位セシヤ在ニ注意スル

(十) 駛力及ビ風力苗頭ハ小目標ニ對スル射撃キテ
著シク命中ニ關係アル

(十一) 減装莖ニ對スル本艦駛力苗頭表左ノ如シ

砲種	駛力	六	八	十	十二
十五吋砲	八	二二	一四〇	一六八	
十二吋砲	七・七	一〇・二	一二七	一四四	
七吋砲	七・五	一〇・五	一七六	一五二	

(十二) 十五柵砲及び十二柵砲ハ望遠鏡照準器ヲ使用

スル

(十三) 本射撃ニ於テ特ニ研究セントスル項目友ノ如シ

ハ、砲員、射撃ニ對スル心理的觀察

ハ、望遠鏡照準器ノ得失

ハ、變壓器電路ノ効力及其強度

第二期教練射撃ニ於ケル訓示並ニ注意事項ハ

第一期教練射撃ニ準バ唯ダ前期射撃成績ノ

不良ヲ訓戒シ一層ノ奮勵ヲ望メリ

又夕彘射速度ニ関シテハ強テ急速ナルヲ要求セザ

リシ

二、講評並ニ研究ノ要領

第一期教練射撃

(一) 本艦竣工以來初メテノ射撃ニシテ訓練未ダ充分

ナラズ殊ニ標的ノ構造稍ヤ小ニ失シ明亮ヲ欠キ

タル致ストコロヲカルベシト岳モ今回ノ射撃成

績ヲ見ルニ遠キハ五百米突ヨリ近キハ六百米突ノ間

ニ擴散シ結果良好ナリト言フベカラズ各員ハ益々

奮勵努力内臆砲其他ノ訓練ニ務メ来ルベキ

第二次ノ射撃ニ於テ優秀ノ成績ヲ收メニ

シテ

(二) 望遠鏡照目器使用ニ付復熟セルヲ致スルナリトハ
言ヒ一番ニ着テ二冊砲、如キハ屢々苗頭ヲ又對
一取リタルガ如キ注意ヲ要スル処ナリ

(三) 前部旋回砲ハ減装薬目盛銀ヲ用エハキ射撃
初期ニ於テ誤テ常装薬子薬目盛銀ヲ用ダ
ルガ如キ恰モ初テ教練射撃ナルモノニ從事スルノ觀
アラシメタリ嚴ニ注意ヲ要ス

(四) 要スル今朝ノ射撃ハ各員ガ久シク船砲射撃手ニ
馴レガリシ為テ注々砲声ニ心ヲ奪ハレ、等根根輕
躁ノ状ヲ呈セシ感ナキニテガリシト呈ス其誠以テ
事ニ當リシ証跡充分ナリシホテ疑ヲ容セス歟

0063

敵前ニ於テ射撃ト云ハ戦鬪ノ主眼ニシテ射撃ノ訓練ニテ其ノ要素タルヲ各員カ實ク不言間ニ自覺シケルヲ明カニ洞察シ得タルハ大ニ幸ナリト云フベシ

然カモ此過度ノ熱心ハ却テ其中正ヲ失ヒ為ラ沈着ヲ欠キ錯誤ヲ招キタル原因トナリタルモノニシテ飛砲射撃ノ貫熟セザルノ致スル屢次教練射撃ノ必要ナリト立證スル以テ

此事更ニ又々研究頂用并ニ一項ニ砲兵ノ理的觀察ニ對シ解答トシテ見ハリ得バキ乎

研究項目並ニ並ニ對シ解答別ニ之ヲ求ム

第一期教練射擊

前後兩回ニ於テハ教練射擊ノ成績ヲ考査スル儀

ク一月ノ短過ニ對シテ者々ノ差違ヲ察スルモノ如ク

第一期ニテハ標的ノ前後六百五百米突左右十卒

米突ノ間隙ニ於テハ彈着ノ第一二期ニテハ前後

三百二百米突左右各半米突ノ間ニ集中シテ

高ニ因テ示セハ恰モ第四面ノ如キ比例ヲテシ其面

積口於テ四ト一ノ割合ヲナスヲ見ルベシ天候ノ良否

ナリト標的者明ナリトハ特校並ニ下士率ノ訓練

練ト相符テ第二期ヲテ此成績ヲ得セヨトシ其間

ナリトオヤムルベカラス今第二期射擊講評要

九

0065

領事日記

一般に合角射撃を以て前回は比して天候好悪に標的
ノ良否等々多少見し平ノ成績ヲ傳セタル事小國
タリシト云フト是モ概スルニ各員ノ射撃術上進歩
一收進歩ヲ認ムル可キ事也

然カモ昔人之如ク只以テ遠足ニキリテ不審ノ事
射撃ニ関スル事ヲ待ラズニ是レ其ノ射撃術上進歩
法トシテキリテ是レト執ルト是レ其ノ射撃術上進歩
アリテ是レ也

凡ソ今日も射撃は二トシテ砲火ノ効力如何を
而テ吾人自下ニ事ヲ辦スルニ砲火ノ効力ヲ

第二期教練射撃

最後所目ニ於ケル 教練射撃ノ成績ヲ考查スルニ偉

々月ノ定退ニ對シ著キ差違ヲ遂ケタル者ノ如ク一期ニテ

標的前後百五十五百実在左左十百実在右四半実在

左端者キ爾テ多ク前後三百二百実在左右各四半実在

角集申シテ高・因テ示シテ恰ニ右端如キ比例キ其

面積ニ於テ四上ノ割合キテスル見ルベク候儀好キト標

的者明キハ將校並ニ下上等ノ訓練相射テテ爾

コレテ成績ヲ得セトシテ大ニ其ノ上ニホリトスル今

期射撃ノ講習要領ヲ左ニ記ス

の般ニ期射撃キニテ前同比ニ是候儀在

十

0067

標的、度程等も多少見れば、成程、得せしむる事、固
 かり、さうして、遠も概これに、谷多射撃、術上、格、等、(限)
 直歩、認、心、(認、踏、也、不)
 然、も、書、人、の、さ、う、に、決、し、ま、法、定、之、に、キ、キ、と、之、を、守、り、射
 撃、に、志、を、志、す、事、非、校、長、に、任、員、の、所、行、り、と、他、に、之、に、違、つ、
 意、ト、執、心、ト、に、於、て、事、多、ク、之、に、足、示、し、名、カ、ル、ヲ、覺、し、と、
 凡、今、日、成、敗、の、主、ト、シ、テ、砲、火、の、効、力、如、何、を、
 而、シ、テ、吾、人、目、下、某、部、の、射、ト、シ、テ、砲、火、の、効、力、ヲ、

發射スルニアルコ想ハ、射撃ノ指揮法ニ在リ、堅固取
 扱ニ當ホテ、研究ノ餘地アルヲ認
 冬實ニ須ク一層ノ大奮勵努力カラ要ス
 三ノ次ニ揚ゲル諸項、今更ニ射撃中ニ發生スル故障ニシ
 ラ考ル、吾事者、周到ナル注意ニヨリ、之レヲ束
 前ニ防止シ得ルハモ、ナレカ如シ
 (一)ニ番砲不発、原因ハ今モ尙ホ推カレ
 属シト云ヒ、其不発ノ際ニ於テ尾栓ノ開放ニ定
 規ニ分間ノ權餘ヲ遺カザルハ、最モ戒ルベキ事ニシテ
 特ニ今日ノ場合ニ一火庫ヲ來サシカ人真ノ
 損傷ニ加フルハ、本所新聞カ、一部ヲ喪失スル

0069

不慮ニ之ケテ至ルヤモ知ルガカラズ特ニ注意ス
要ス

四番砲不齊ノ原因ハ廢池内諸海螺ノ後甘アリ
斯ノ如キ者砲底ニ查リ宜シク検査ヲ行フハモ

ノミシテ当局ニ當ルモノハ注意ヲ求メテナラザルモナリ

以テ却旋田砲ノ屢々不齊ヲ生ジタルモ可取ト考シ

テ諸海螺ノ後田地取線ノ離接部不齊分ナリシ

ト飛路接合部ノ全路ヲ通シテ廢池ノ甘シク

浸潤セルニ起因セルガ如シ是レ又夕海音心ヲ要シ

曰ニ岩砲ニテ撃穿打方ヲ行フニ當リニ番砲手ヲ

高率ニ集メテ水平ニ立テ引カスルハヤシク斜メ

上方に引かえたる打針、肩突起部を交障せし更さざるは
電氣の形跡あり如斯くも諸者より限らず撃たせ打方ヲ
行つても各負の負に鑑みずんばナラズ

(小) 后部旋回砲に於て不慮に因つて更らざるは打針夫端の
火薬尾に附着して各砲に番砲手の尾柱に開放した同時
布中を用ひ打針夫端の減速を必要と認め

(小) 九番砲、農射の距離の測定に照準ト共正しかりし
多キに拘る苗改選の是れ軍に一獲、命中を得しと此
取中遺憾ナリ

(小) 各砲射手甲乙照準ノ一致に欠く疑ひありし何人射撃
於て深きを意スルヲ要せしと此れ各砲射撃に於て最

0071

注意心ヲ要ス

甲午艦査法實施ハ必要ヲ認ム

(シ)

之ヲ要スルニ不遑、屬國ニ其根本ヲ求メ、略奪砲臺トシテ

電氣的要具、日ニ盡シ、没入シ来ルニ拘テ直接事ニ

共ニ砲臺電氣的知識ノ素養ニ乏シク、所内本教、

此馬者カ帝ノ故澤ノ跡ヲ追フニ忙故ト云テ、感キニテアス

(リ)

射撃ノ攻究ニ自ラ射撃ヲ實施ス外、他人ノ射撃ヲ見テ

之ニ於テ得ル心ホク、歎クヤカシクモナリ

各砲臺ノ多ク、自砲ノ射撃ヲ終ルヤ、又他砲ノ射撃ヲ觀シ、

傾向ナキニテ、訓練ヲ要ス

其參謀界ニ關スル事項

第二期教授耐撃ノ際ニ於テハ數回ノ不獲シ際キテハ別ニ急務故
棉検傳ニシテ認リ又キモノ亦不獲ノ原因ハキテシテ電路
持合ノ完全ニテカリス起因ニシテテ直ニ修復スル得ル

0073

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

0074